



EL PRIMERO 誕生 50 周年

50 年の成功を振り返って

第 1 章：

1962 年 – 1969 年：El Primero、伝説の誕生

オブジェとは時代の賜物であり、偶然生まれるものではありません。ある時代の風潮に端を発し、時にこれを先取りすることさえあります。一時的な流行から生まれたオブジェは、時が過ぎれば忘れられるものです。反対に、時代を先取りして作られたものはそう簡単に消えることはありません。El Primero もそうしたオブジェのひとつです。El Primero ムーブメントは、まるまる 7 年の開発期間を経て、1969 年 1 月 10 日によりやく完成に至りました。このムーブメントが誕生した背景を振り返ってみましょう…。

1960 年代初めの時計産業は、手巻クロノグラフにとってもはやこれが登場した時ほどに有利とは言えない状況にありました。人々は、自動巻腕時計を身に着けることに慣れ、毎朝リュースで巻き上げなければ正確な時刻を表示できない時計を求めなくなったからです。自動巻時計なら、手首に付けて普通に生活していれば、特別な操作は何も必要ありません。近代化によって効率が良くなるべき時代に、リュースを回して時計を巻き上げるという行為は時代遅れと考えられるようになったのです。

この「近代化」という言葉はあまりによく使われ、その意味を失ってしまった感がありますが、1960 年代の初めは、さまざまなオブジェが生活を容易にし、時間を節約してくれる、輝かしい未来と完全なる自由への期待を秘めた言葉でした。

当時の風潮は、行動欲と理想主義、人間信頼の念に満ちていました。人々は、次第に外からの支配を受けることを拒み、自分の運命は自分で切り開き、時を、やがては宇宙を支配することを望んだのです。彼らは揺るぎない自信を持っていました。フランスの経済学者ジャン・フーラスティエが「Les Trente Glorieuses」（栄光の三十年間）*と呼んだ、第二次世界大戦の終わりから 1973 年の第 1 次オイルショックまでのこの期間、ヨーロッパは著しい経済成長を続け、完全雇用状態にあり、その結果購買力と大量消費が大幅に伸びました。

人々は、高度な技術が発達した未来の中で幸せな生活を送る自分たちの姿を想像しました。テクノロジーの到来がもたらす両義的な側面を、誰一人予想することが不可能だったからです。やがては宇宙を旅し、車は空を飛び、家庭ではロボットが家事の手伝いをしてくれる、誰もが幸せな未来。そんな世界に手巻時計の居場所などないのも当然だったかもしれません。それとは対照的に、自動巻時計は近代化が秘める魅力そのものでした。

1962 年、ゼニスでは、マニュファクチュール創業 100 周年を記念して自動巻クロノグラフの開発に取り掛かろうとしていました。自動巻クロノグラフは当時まだ市場に存在しておらず、世界初となるわけです。とはいえ、単に既存のキャリバーを採用してこれに追加モジュールを搭載するなどのもってのほかです。むしろ研究開発におけるゼニス独自のノウハウを駆使したいとゼニスは考えました。「目的に合わせて変える」のではなく「一から考え直す」のです。



1966年から1967年にかけて、ゼニスの経営陣は振動数毎時36,000回の高速振動ムーブメントの開発を決定し、天文台コンクール用の部品を作っていたゼニスのクロノメーター部門がこの研究を担当することになりました。高速振動というテーマの選択はまさしく時宜を得ていたといえるでしょう。この言葉は精度の概念と結びついており、スイスクロノメーター協会をはじめとするさまざまな計時協会で話題に上ることが多かったからです。ゼニスが自らに課したチャレンジは、毎時36,000回の速さで振動し、1/10秒の計測を可能にする超薄型で完全一体型の世界最初の高振動自動巻クロノグラフキャリバーを開発することでした。

El Primero の設計にあたり、クロノグラフの構造全体と生産方法が完全に見直されました。このムーブメントがきわめて革新的な生産方法の起点となったのは明らかです。それまで、時計職人は、クロノグラフ職人がキャリバーの様々な構成部品を受け取り、やすりをかけてから組み立てを終えるのを待たなければなりませんでした。当時、スエージ加工にはある程度の誤差があり、修正が必要だったからです。当時組み立てを担当していた Christian Jubin は、「受け取ったベース部品にやすりをかけ、うまく機能するよう調整しながら組み立てなければなりませんでした。クロノグラフの仕上げとは基本的にそういう作業でした。」と説明しています。ところが、El Primero では初めから設計が行われ、時計職人はより効率的な方法で作業できるようになりました。スエージ加工の精度が向上し、最低限の誤差で、量産に向けた部品の製造が可能になったのです。「El Primero の場合、部品をとってそれを組み立てていく。それだけで良かったんです。」と、El Primero の製作者の一人は指摘しています。文字どおり劇的な変化でした。

ところで、ゼニスはなぜ、高振動キャリバーを開発しようと考えたのでしょうか？ 「1960年代、どのブランドも高振動の分野にのめりこもうとしていました。ですから、どうせ新しいものを開発するならトップを目指すべきだという考えがあったと思います。」と、当時の証言者は語ります。振動数が高いほど誤差は減少します。毎時36,000振動、毎秒10振動の場合、ムーブメントが受けるさまざまな外力の影響も少なくなります。また、高振動で構成部品の摩耗が早まるのを防ぐため、二硫化モリブデンを使用した特殊な表面処理を使用しました。この画期的な表面処理は一部の機械産業ですでに利用されていましたが、時計産業ではこれが初めてで、テンプに動力を伝えるレバーとガンギ車のプラットフォームの表面に薄い層を形成し、滑り摩擦係数を良くします。

El Primero の開発は過酷な競争環境の中で進められました。当時の Zenith-Movado、Seiko、あるいは、Hamilton-Buren、Breitling、Heuer、Dubois Dépraz のブランドで構成される Chronomatic グループをはじめ、複数の時計メーカーが世界最初の自動巻クロノグラフの開発をめぐる躍起になっていたからです...。「ゼニスは、日本とスイスの競争を鋭く意識しながら、世界初の自動巻クロノグラフを開発しなければなりませんでした。どのブランドも数か月でこれを達成し、ほぼ同年に発表に至りました」。当時マーケティングチームの一員であった Marc Roethlisberger はこのように回想しています。

こうした状況の中で、ゼニスは自社開発の自動巻クロノグラフを公式発表した最初のブランドとなりました。1969年1月10日、ル・ロククルで行われた記者会見で、毎時36,000回の速さで振動する El Primero の誕生を発表したのです。プレスリリースの見出しには、「Zenith と Movado が、1969年1月10日に世界最初の高振動自動巻クロノグラフを発表」と書かれていました。ムーブメントは、1960年代に誕生した合併会社 MZM Holding (Mondia Zenith Movado) の名で公開されました。この高振動により、El Primero のテンプは1秒を10に等分して、大型の秒針による1/10秒の表示を可能にしたのです。



地方紙 Express は、1969年1月10日の記事に、「ル・ロククルの Zenith S.A 時計工場は、2つの高精度ウォッチを1つにまとめることにより、驚くべきパフォーマンスを達成 (...) もうひとつの偉業は、この2つのメカニズムが従来のクロノグラフよりも少ないスペースに収められていることだ」、と載せています。プレスリリースはさらに続きます。「世界初の高振動自動巻クロノグラフ、El Primero」、「クロノグラフと自動巻ムーブメントのメカニズムを一体化させることに成功したのはこれが初めて。Zenith と Movado はこの技術的快挙を達成したばかりでなく、自動巻クロノグラフのメカニズム全体とデイト表示を従来のクロノグラフよりも小さいスペースに収めることに成功。ムーブメントの厚さはわずか 6.50mm。文字通りの偉業に他ならない。」... 挑戦をいとわない時計職人たちは、さらに一歩踏み込んで、最初から 2つのバージョンを発表しました。カレンダー機構を備えたシンプルな“クラシック”バージョンと、曜日と月、さらにムーンフェイズ表示を備えたクロノグラフです。

さて、このキャリバーはなぜ“El Primero”と命名されたのでしょうか。キャリバーの名前については、発表を直前にひかえた秋に検討が行われました。ゼニスの経営陣は、ル・ロククルのマニュファクチュールが競争に勝って他社よりも先に自動巻クロノグラフを発表するだろうと確信していました。しかし、名前はどのようなものだろう？ 数回にわたる討議の結果選ばれたのが、“El Primero”です。スペイン語で「第1の」を意味するこの言葉は、誰の耳にも力強く、わかりやすく、心地よく響きます。El Primero は文字どおり「ナンバーワン」の時計となったのです。

今日、私たちは、地球と人類を守るという重要な課題に直面しています。つまり存続をかけて生きているわけですが、El Primero が登場した時代は発展の時代であり、新しい世界を発見し、宇宙や惑星を植民地化したいという憧れに満ちていました。El Primero の発表の1年前の1968年に公開されたスタンリー・キューブリック監督の映画、2001 Space Odyssey (『2001年宇宙の旅』) は、スタンリー・キューブリックとアーサー・C・クラークが共同で脚本を書いたもので、1984年に後者が書いた The Sentinel (『前哨』) を元にはしていますが、世界初の高振動超薄型自動巻クロノグラフはまさしくこうした状況の中で生まれました。El Primero を選んだ人は、人間を月に送ったこのテクノロジーの時代に生きていたのです。1969年7月21日、人々は白黒のテレビ画面を通じて、アポロ11号が月面に着陸し、ニール・アームストロングが人類で初めて月面に降り立つ姿を見守りました。そして、この偉業の数か月後の1969年10月に El Primero クロノグラフが発売され、もうひとつの「より手に入れやすい」偉業を購入できる機会を得たのです。さまざまなメカニズムに支配されていたとはいえ、1/10秒単位の計時がエレクトロニクスの普及を予感させる新しい時代の始まりを告げたことは確かでしょう。

1969年1月10日、ゼニスのプレスリリースには次のように書かれていました：「競争がますます激化する世界市場において、この傑出した作品の功績はスイス時計産業全体に追い風となっています」。El Primero は、1969年のバーゼルフェアで一般公開されました。Chronomatic グループのキャリバー11は1969年3月3日に報道機関に公開され、Seiko は同年5月に同社初の自動巻クロノグラフを発表しましたが、人々の意識の中では、どれ一つとして El Primero に勝るものはありませんでした。El Primero は紛れもなく世界中にその名を知られる数少ないキャリバーの一つとなったのです。

* Jean Fourastié (ジャン・フーラスティエ)、Les Trente Glorieuses ou la révolution invisible de 1946 à 1975 (『栄光の30年、または1946年から1975年までの不可視の革命』)、1979年に Fayard 社より出版。